



芭蕉翁行狀記

全



5
1821



えつれりる膳所松本のあつりよはむりし
方あつりあれしつりあつりてつりあつり
六月の悪ゆりつりあつりてつりあつり
巻もつりあつりつりあつりつりあつり
よつりあつりつりあつりつりあつり
とつりあつり

六月やあつりつりあつりつりあつり
お祭りと云文月十日と云つりつりあつり
のつりあつりつりあつりつりあつり
船よあつりつりあつりつりあつり

つりあつりつりあつりつりあつり
つりあつりつりあつりつりあつり
つりあつりつりあつりつりあつり
丹野うのあつりつりあつりつりあつり
岩相観のつりあつりつりあつり

つりあつりつりあつりつりあつり
右郷小之越金乃つりあつりつりあつり
おつりあつりつりあつりつりあつり
菅橋社園あつりつりあつりつりあつり

治其日と彼の願あり

一 家話 白紙より杖や暮暮

あつたむちを白もわきまをむしりしうも
の及古竹哉ともいひしあ後の形かよとや
奥の細
た白る集と君はくおれし氏のうしりしう
しあつたむち

菊月よりつしし難波より座とさきうおれむ
高松よりしりしりしと惟勢も考あしり
つれさうしきさうの第しりしりしりしり
夜あつたむち

むらとつて鹿角懸り秋の座

菊の香や素より古くも仲連

とあつたむち浪華よ入きよりあの日には野あ
しりしりしりしりしりしりしりしりしり
つれさうしきさうの第しりしりしりしり
夜あつたむち

もくしりしりしりしりしりしりしりしりしり

浪華の人しりしりしりしりしりしりしりしり
あつたむちしりしりしりしりしりしりしり
あつたむちしりしりしりしりしりしりしり
あつたむちしりしりしりしりしりしりしり

什物と云ふは、
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

利未人のつらきことなることありしを
けしき美事なりしはしきおの輝り
傳ふに河津のいしきなるまより
うれおのふのかく強しなりしを
よしき方ありて日教のぬけ及迷ふの
條命をのこしはしき後路通る
ことありしはしき
きしきありしはしき
くやしきありしはしき
せめてしきありしはしき

三塚の前松乃松のうのわらわしき
いしき花はしきありしはしき
いしきありしはしき
二七日の松のうのわらわしき
松のうのわらわしき
今いしきありしはしき
月代やしきありしはしき
いしきありしはしき
原よりしきありしはしき

元禄七年冬於湖之三井寺に

綴此記 小治弥路通謹書

癸二十日十月廿日會

追善各集粟津義仲寺請直惠上人設齋

本抄しやみしあ抄海路通

神前一月の二七日迄乙列

賤目の障子よりきき本第

舟の便りりり荒麦去毫

おろねハ此年の旅のつとめ卓袋

うらやまし弱御公頃本志

ゆりくちあつて晴るる日の正道

雲もくちくち松の首如行

前漢とよまるとは秋更し丹野

焼のつりて大舟よりゆ智月

おのじまの珍みともついで去芳

坊もてりりく毫より去海

庭後とてゆめゆめ乙列

傳氏くはあく本第

解ゆつてていよと智月

ちうらやまのひり川原子年袋

新法源のあまに 跪ひざまづふ 若の月 ちを毫
ぬくはよめあつらふの産を 丹野
洞と馬へ進つて 京原を 治也
まふれよとあつて 正乃
わらうしは西宮司のまの葉 心乃
わらうしは食よ呼まはり 土乃
まふれや 慶法は人の人わらふ 本志
傳乗るはまて 記よとつて 土毫
園のまらふ人のあつた 他よ女 正道
たのひおに ぬ晴てちり 心乃

角紙を海へまき 沙をうへ 本等
羅後着あつて せとつて 本志
小栗柄をよよとつて 秋の野 土乃
枕を巻きて 歩つて 歩行 心乃
朝の月をあつて ぬけのし 卓袋
若の亭に ぬけをまき 丹野
郷と若らわらふ 露の星 心乃
穴吹の飛やまらふ 坊 乙乃
沢紙と若らわらふ 坊 本乃
若らわらふ 乃 声 土毫

名りさくらやとみ次山形十羅刹 正道

床乃小淵下 残る縁行志 智月

ちろくろとんそてり 山田月 卓袋

世やせもいし 笠田船 路也

河鳥のく 骨入る 終も 句も 土毫

きせは乃さそて火さう 丹野

天井の籠の性恨も 終入 乙列

在子かゝ後と 終やま魚蝶 筆

三十七日用、二 終自益之條、乙列、三 宅

本わしや 國が山の権の實後 (本言成塚)

の浮田ち水よとら ね日枝のれく 暮景情更

雨されさうい 志ホウ家のなすう 一もや 終りし 終

終の善道さうい くるたよび 一言古むの 小

横里の院と 呼く 竹籠と 終り 一 終りの夜と 終

て 風雅の教誨 會者 定離の 令と さいく 文

り 焼小 智月、 紙子の 袖の 入る 終 終り

か 終り 終り 終り 終り 終り 終り 終り

小の 終り 終り 終り 終り 終り 終り 終り

ふ人 終り 終り 終り 終り 終り 終り 終り

一と 終り 終り 終り 終り 終り 終り 終り

幼住居乃記一巻也つらぬらるるつらるる傳此
 後形えとて自直乃像家一なるもの如
 ち光陰とてすことしとて小字を斗
 少とてむくきしらす常速とてさるる像の
 具法よとてたしむるを神像とてさるる神をひ
 くとて二七二七日ハ義仲寺ありて道長とて日信仰
 け事とてむくき像のあらわぬ人くむを
 けく生前のとてくくむくむく
 つく枝らと三十捧やむれの内 乙訓科
 費少とて形とて本名とてむくむく 本節

ちとて此乃真乃牝龍や老の月 惟然
 之とてまゝの中にもしむるれ 古毫
 像の陰のむくむくむくむく 初月
 費少とて清くむくむくむくむく 錦江
 ち乃繪とてさるる費とて床の上 丹野
 ちとてむくむくむくむくむくむく 海海
 四七日為頭院笠杖寄進義仲寺
 各題三物有句
 け美はくく川のとて地高とてれ 本節
 生涯とてさるる名もとて頭院袋 海海

乞ひの政院一々目を見まされ
七毫
存してつる素のなれおき道の
乙列
星おちやもの心ゆる物枝の枝
儀々
花のみらうらゆるほゆる星の輝
丹野
廣くしきゆる指て君佛
高進
を此見や老にけりしれはさき
却月
忘れておちる一々もゆるおき
本志
心まらぬや宿こころの枝の瘦
惟然
本のしりの様もけりしる兼とさ
為る

日月志 西次

り

望月の雲の海をたしり
乙列
を此野原小の心個も
本節
食とくころり同し時をさ
高れは焼を巧くやるる
月の夜もさきい流るお松の下
仕業てゆる小雛の雛ナギ
ものおしよのそをいそく早稲のそ
椽ツルギの棟のたゆる
首毎
あやまのりともい所ありたい

酒を飲つて老柳の影よとて
清わたりて皆まわして枯
ほりくと楷ホクをく雅の爲貴じて
こころのゆゆはよきとて
世の美ふの小海をさすゆふらん
うらうらと心晴かきいとほし
老有りり力と足せと打さぬ
まぶさふりかたに月し
養之月よと弱と信徳の鏡鏡
かあみをととるし巻の網の網

廻危
運危
推危
文竹
昌居
去来
重推
正秀
威高
外吹

まふと世遠あつとまの如
わつとにわつと系統は是
指もあつと足感としくとも
いつとをいそとゆふとあま
時多船強うとさつとや
二書とええとをのちりて
清と知よあれとて書とあ
中とよとて心勝初のみ
あふ殿の立統とわつと
しと法とてく徳板の法

知月
廻危
鼠危
終危
本節
運危
探危
惟危
文竹
激刀

あとの月あしく水うらむ心
多ゆてこゝろ鳴くゆゑあざし
雲津波や海く新の岸水
大木の物と消くう海の家
竹と木も雲とわたり休む
君の心旅ゆく人の夜也

夕月
乙別
正道
木節
路五
相隣

盡七日反古さく

枯草秋も陸奥海にみり
雲をまきく反古のこゝろ生火桶
かまきう鳥難波のうらやみの梅

路五
夕月
去毫

うへ死のや旅のはん流の虫のか
霜の夜や大をう小雲を居かき

乙別
木節

短悼 あまのこゝろをまきくうらやみの梅

いぬまいとあまのこゝろをまきくうらやみの梅
屋舎んをまきくうらやみの梅
是もしらあまの梅のみをのさ
わらわりのうらやみの梅
一時あまのこゝろをまきくうらやみの梅
野とあまのこゝろをまきくうらやみの梅

夕月
糸月
糸月
糸月
糸月
糸月
糸月

わくわくの海の色やねのそ か 巴水
本塚の本つじしねめを鳥 今 ノ松

海那波くさくさ海うらうら つ くのゆく

羨望も終のそねや昔のそ 大 葉文

塚色し平心は海を磯の波 乃 神

散りくさくさ中しし柳のそ 三 鳥白

ふぬ人の宿の姿や自然石 大 芦吹

木の根て垣はよるそ海の色 安 世居士

未那まてそもといふ火のそ 心 流

深香の煙むさうりあそ 江 山

ちよ海くさくさあつそ海や 房 山

杉木はちわくわく 丹 野

あつ人の足跡より 路 平

誰の後に海をくさくさ 大 成

大ぬまの鳥も 百 々

あつそ海や海の色 友 白

とんころりと 五 季

つりやりと 何 知

海身海より海身の色 大 夜

あつまつて 荑 栢

冬の野や何となくは相も 京 路 静
 又つづける音もそとより六の苑 六の苑 塵生
 墓の机とけしらの音もこれ 六の苑 牧童
 死光園の茶もし 唱あふ 和伴名節 不 与
 三光の音もあふる 洞うら 三光 宇 白
 一ゆふとふねむ 音 佛 三光 死 障
 大井川 満て出 一 針 月 大井川 如 竹
 ぬれあふよ 日 命 一 死 音 の 音 ぬれあふ 舟
 猿蓑やふのふのそれ 子乃 音 猿蓑 三 十 六
 かく音の響きて 音 乃 舟 音の響 南 浦

推の葉は 海ともしは 世は 時と
 西影と 君ら有 塚の 冬は 波 西影 周 来
 めくく 日の 柔湯よ 一 如 冬 の 端 めくく 伸 炭
 蓑 虫も 舟よ 一 如 冬 の 端 蓑虫 孫 音
 燭 消く 周よ ぬり 一 如 冬 の 端 燭消 如 風
 を 菊と 音も 舟よ 一 如 冬 の 端 を菊 子 傳
 舟 向り 舟の 音も 舟よ 一 如 冬 の 端 舟向 又 川
 枯し 舟代 舟の 音も 舟よ 一 如 冬 の 端 枯し舟 頼 光
 けあや 舟代 舟の 音も 舟よ 一 如 冬 の 端 けあや 十 水

和名やあまの所へ海の上京 籠毛
 香の上のふらふらとぬ影の現キ 白キ 水
 清きしと次婦のうれしきミ 白キ 蕨
 宵月や蓮のあけそめのさそミ 夕可
 いのくやまの木枝よ一ゆれ 定彦 竹葉
 ね本の二なるの君に於て海 実彦 永

右一巻(常陸義仲寺授考)く

えんぎ 本年 八月 日 記

芭蕉庵小文庫

本曾乃持言やそのく春の草もさかぬらん言の
 葉はむかしつらきもさかぬらん言の
 つて風情をばあ日さの君よのこーきまひぬさ
 とひきしやのぬらぬ店らもさかぬらん言の
 冬亡所らうらぬむらじもさかぬらん言の
 の松風、のちのちのぬらぬ店らもさかぬらん言の
 宗祇のやとやうぬらぬむらじもさかぬらん言の
 小納の世帯のちのちのぬらぬ店らもさかぬらん言の

中書やあまの舟り海の上
書の上のふらふらとぬ影の影
傍りしと吹ゆとぬしと
青月や重なりぬるのさ
いぬ人やぬ本枝上一ゆれ
社本の二方の書とぬる海

右一巻(常陸)赤神寺校考

えんぎ 本年一月一日

芭蕉庵小文庫

本曾乃情言やまの春の草
葉はむかしのさきさき
て風雅をばも日よのま
とひしけのぬるま店ら
多亡師とていぬむら
の松風、のちふし
宗祇のやとやう
小細の世縁のち

志とつらさきく情とらむるよまの指師の恩と
もきこふ小きくはみ霜落葉うらみのきこひの
しづかろ石牌とくくおれぬの芭蕉とく
しなむ海雲松ふらねまふらぬしづか
愁腸とくわ

目次の新のうねしづか後海史邦

小文二庫

老く部

浪田の宿りて

宿しと名とねのしづか

旅宿

しづか時多るわきまに返歩也 山店

兼河岸てきくや秋田のしづか 嵐行

雷あつとねがれ野のゆきとれ 大村

食所小きしづか村のしづか 去来

板壁や馬のうねがれと小東海史邦

雑考

多るうねやしづかもにしづかのしづか 嵐行

しづかしづかやとらぬのしづかのしづか 史邦

城山一 雛子おどり 小六月 山店
 まゝ 橋ふ 千鳥鳴り 初山 史邦
 をさふ 野氏 古も 後らわ 史邦
 薫物の ともれ ちや 下 枇杷 史邦
 下 苧の 敷ふれ して 花 養浩
 大通 店 たる 道 圓居士 芳名 とき
 一し ちや ちや ちや ちや ちや ちや
 一し ちや ちや ちや ちや ちや ちや
 夜 霜と 海 ぬり ちや ちや ちや ちや
 ちや ちや ちや ちや ちや ちや

其が ちや ちや ちや ちや ちや ちや

舊庵作の像一調

芭蕉 舎と 神り 像の前 史邦
 遠く 舎や ちや ちや 舎の 一文字 今
 水 風と ちや ちや ちや 十夜 今
 佛 命 講や ちや ちや 同 又 史邦
 上人の 鼻 ちや ちや 佛 命 講 史邦
 ちや ちや ちや ちや ちや ちや 史邦
 ちや ちや ちや ちや ちや ちや 史邦

土の網と昔とをとりあはれし
物とる百人前とわらう
湯取紙内紙の窓より
栞物紙も取ふ合せり
松の坊
心きくはよ別て能寝る霜
あはれくとも中もむら
霜後乃寝さめくや物のも
霜のほろりしと
ゆきとせとあはれ

史邦
山店
岩行
養浩
史邦
惟然
種文
丈草
とせ

大燈より寝よはは
正秀亭書
草羽織とて
風乃わらう
ここのち
冬川や木の葉
片粉や

雪芝
史邦
丈草
熾香
蘭芳
惟然
梨雪
蘇人

毛衣小袴... 鴨井是... 比呂氏
雞乃行脚... 或婦... 支那
金屏の松... 冬... 支那
小屏... 斜嶺

旅者

大石地... 許六
梅の食干... 山店
夜神... 史邦
菜を... 支那
留主の... 芭蕉

甲... 史邦
子系... 山店
子系... 史邦
解... 下田
幽... 智月
婿入... 作六
... 支那
... 支那
... 支那
... 支那

鷓鴣 家にはさきふくしめれを 如行
根の色 物さく 言れくれ 史郎

打古淡眺 辞

山 嶽 くや 塔さう けうの 言さう 史郎
納豆さし じり ぬや じり ぬの 言さう 史郎
世の 麻の 容も たりぬ 一 世れが 史郎
さうくと 花も 氷も ちかれう 今
冬梅の けしん けうや 鳥の 声 去 芳
あはれの花の さきふく の 日さきふく 智 月
しらさきや 穴 徳くらの 守め 合 史 郎

わが 徳の 宿着ふ ても 日 痛う 家 山 店
丹波 路や ちあく ちあく とも 徳 去 芳
月花の 思入 針さき 寒の 入 去 芳
さきふく や 山 伏村の 長つ とも 史 郎
一 両や 相傳の うつ 事 納 史 郎
あはれ とも 言て ちあく ちあく とも 史 郎
今さき とも けしん けう とも 事 納 山 店
さきふく とも ちあく ちあく とも 史 郎 芭 蕉
史 郎 今

さうゆりや一帯のくし年とては 智月
 しろくろひさしあはし市の原を 正秀
 蛤をいけらうしむ年一れを言 けを代
 さうやまや嘆氣とさうの言 探志
 客人のつよあうて年のくれ 乙例
 那うとれて空梅も年の史然 史部
 いとあまをわをさうの衣をり 史部
 解春よ小勝をさうの標値を 今
 石白之讚 石を代
 市中よ有て伝藝よさうのめあをけ

ぶ井の始とよくとれよりその終と
 くさ事はくく一高山竹林の極古も
 ちん代あくはく寛平華山の上皇
 も終りくくあうてさうの徳を
 ころくす唯石知の初さうの三平二國師
 はさうのくく肉をさうのけはさうのく
 氏家よはさうの麦前もさうのくも叙こ
 ちん落のあまのあうてさうの片けをさうの
 さうのあまのあうてさうの論とれも

小のぬく声も留流も古代のまゝめて
枝葉さうしる葉もよひらるとよひぬら
いりりれらる世たりや

札銘

同が時をいしらるもく略馬吹嘘入
まどろしぬらまはらぬ書と細
こめて聖意賢方の精神とらるる静
かると記を首とさうて義裁素た方す
ふきくまぬかまうま一物之用と
うらうら高はすめりて二尺両俵小わぬ

う張をぬらるの卦を彫り一節留龍
北馬の負小智ふ是とらるる一用とせ
むやまう二用とせや

夜蘭子未元祿仲冬芭蕉書

對門人僧

乞や世の煤は深ぬ古合子
煤掃之説

明ほの空しるものほくくく

小文庫

春之初

年くや接よもせり接の面芭蕉

鳩の海也よ年とらして

三日昔と水は

大津繪の筆のこしらや何併合

鳩のこの礼観筋に遊ぶくいとど

こらみらうと接うと接のこら

ひぬよこらと接の海もふくは

若くふく接ふ何とせと具一

トこらと接ふ何とせと具一

甚く葉枝杖はくもと接自畫の

像はくもくもとのこら花洛を我

五兩亭小遠居一と接一所名は

のつこらと接ふ何とせと具一

は原のつらうと接くわら二月花

小悟を是と接ふ何とせと具一

はつと接ふ何とせと具一

しるぬのふとよあ〜るまうが今

鞍馬

信ふうい合とらるは能きとら野意

里ほこのねのささや若さう土芳

呼あ〜まもてい〜や栞の妻を

鐘金も別のとけ栞の意而新

さう道た〜もさる栞の妻史邦

南ふら〜

まゆぬや〜あ〜の跡を〜うせ

二月廿二日

あ〜や氷の信の虫のさう今

味暗よあ〜の跡うたあや脚月史邦

蛇々あ〜すもあ〜し非解芭蕉

夕田あ〜御之廟〜信

い〜ほ〜とさ〜ふ〜非の非解史邦

栞去之辨

あ〜い〜の〜や〜

あ〜〜〜〜〜栞〜

とらふ〜〜〜〜〜

のこころをいかにかきとめておぼしめし
たふとていかにかきとめておぼしめし
とていかにかきとめておぼしめし
たふとていかにかきとめておぼしめし
とていかにかきとめておぼしめし
たふとていかにかきとめておぼしめし
とていかにかきとめておぼしめし
たふとていかにかきとめておぼしめし
とていかにかきとめておぼしめし
たふとていかにかきとめておぼしめし

木より陽ちこもり石の上
史部
山店
一踏
後雅
荊
遊口
支光

晴々松の中よりまゝ 檜 七世代

二月三日 津村海邊より松々 二与

胸透々 源ニノとのまじり 史邦

乃何の帆の波路とあぬぬ 史邦

庵居よ 秋葉ののちゆり 山店

さきき 諸

一日の日とまじり 松の節ま 史邦

松品甲山

七代のもじりも光まじり 今

お望や 震とあむ 松 許六

下品の情

あゝあゝや 折とけあゝ 史邦

下くも 皆居松とて 山店

馬よきや 柳のあゝ 松 小観

梅は 是もも 谷一 山店

萩小 庵とけ 赤松 今

旅行

肉庭とらん せめけより 白松し 虎行

垢部とけ 一のうぬや 松のちき 吾芝

厨中一日もくまにんじら茶山店

難波山

海棠や片八つらあまの臺のまゝ 史邦

僧衣草一り割

慇懃小成しつねや友の陰 今

万日の小成もくまにんじら茶山店

啼子もくまにんじら茶山店

西行傳讀

山にまゝくまにんじら茶山店

ゆゑのぬる日

しせ代

花の海日くまにんじら茶山店

苔石

花乃くまにんじら茶山店

積よくまにんじら茶山店

花の海日くまにんじら茶山店

村中くまにんじら茶山店

系はくまにんじら茶山店

くまにんじら茶山店

史邦

荻原小治の極のしりあしり山店

三月盡

赤橋のしりあしりあぬせき地蔵山店

新宿ハルオ小極のしりあしり史邦

水田宮の星下野のしりあしり史邦

三月

極のしりあしりあぬせき地蔵山店

赤橋の中しりあしりあぬせき地蔵山店

くしりあしりあぬせき地蔵山店

白くしりあしりあぬせき地蔵山店

ウ

切のしりあしりあぬせき地蔵山店

境のしりあしりあぬせき地蔵山店

八初の上りあしりあぬせき地蔵山店

赤橋のしりあしりあぬせき地蔵山店

滝原のしりあしりあぬせき地蔵山店

赤橋のしりあしりあぬせき地蔵山店

赤橋のしりあしりあぬせき地蔵山店

赤橋のしりあしりあぬせき地蔵山店

赤橋のしりあしりあぬせき地蔵山店

猪ののぼりけりてあつた。 邦
きんぎょの所 邦
景の山はつらと花らして 邦
中島のさくら梅の森 店
花の雪降りと神の儀を 々
しやん

小文二庫

其之部

文字摺石

下巻

愚の部 一 姓の字をうやむやに
名姓とも方二同半の石作りけり
一 其のあひふ石ありて其面小文字あり
くや山藍摺みありて小字ありて
くまの山は谷合小埋積りて石は面は下
海にありてこれに花の風情とみらるる
くまの山ありて其面は下
早苗の海ももや 首飾り 芭蕉
前書 なる

狭 庭 井 庵 へ 臨 あり 葉 花
 萩 町 や 穂 多 小 へ くの 花
 山 櫻 や 竹 葉 花 へ 一 葉 花
 子 ませう と は 近 せ む ぬ 葉 花
 し 別 儀 別
 馬 の 古 葉 花 へ 紙 の あり
 山 店
 史 邦
 北 観
 山 店

花 夢 此 枯 け あり 山 店
 落 穂 会 田 居 落 穂 日記 へ あり
 柳 の 葉 小 へ あり 山 店

柳 の 葉 小 へ あり 山 店
 五月 西 や 春 竹 へ あり 山 店
 花 夢 此 枯 け あり 山 店
 川 魚 へ あり 山 店
 箱 崎 や 山 石 へ あり 山 店
 只 あり ぬ 夢 此 枯 け あり 山 店
 同 不 容 髪 へ あり 山 店

瘦馬の鞍つふわろし 暮葉一柁 史邦

宰人しと 東風しと 秋の日の暮

~~~~~

~~~~~と~~~~~の~~~~~の~~~~~

~~~~~や~~~~~の~~~~~の~~~~~ 句空

丈山之像詠二句

風うららけに 襟もほろり 芭蕉

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 大草

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 智月

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 山店

石竹の葉は~~~~~や~~~~~ 史邦

~~~~~

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 今

鴻之臺眺望

切岸や 却此死下し 一文子 山店

安房上縁より 流る苗て 衣木三 鹿行

~~~~~の~~~~~の~~~~~の~~~~~ 史邦

同吊 古戰場

山を日根に するれし ころ 史邦







真向寺

志向也やあまのつと昔縄  
おのしやまも櫻もさるの念  
まゝ一はま涼もまゝ河のち極  
史部 山店

同所楓

日蓮のふももあつた若楓  
まのあまも茶葉もあま楓  
大まやもあまもあま楓  
史部 山店

同 継橋

継橋の田うへや寺の留も  
史部 山店

はまもあまもあまもあまも  
つとまのあまもあまもあまも  
史部 山店

御 臨 幸 記

はまもあまもあまもあまも  
おのしやまもあまもあまも  
舟架もあまもあまもあまも  
史部 山店

鉄 別

新 夢 八 竹 寺 といふの如き首途  
相模屋のあまもあまも  
史部 山店



馬場のさくら樹を料亭に  
 口ふ千石のまきのさくら  
 古く、醫者のとりこむる薬  
 躍のほほえみわらわりの  
 盆のけしきさくらさくら  
 けしきさくらさくらさくら  
 蓬生さくらさくらさくら  
 深のほほえみのさくらさくら  
 丹波さくらさくらさくら  
 節々々々々々々々々々々々

店 店 店 店 店 店 店 店

音のあはれさくらさくら  
 さくらさくらさくらさくら  
 非習のさくらさくらさくら  
 さくらさくらさくらさくら  
 奥の院さくらさくらさくら  
 さくらさくらさくらさくら  
 さくらさくらさくらさくら  
 さくらさくらさくらさくら  
 さくらさくらさくらさくら

店 店 店 店 店 店 店 店



日に... 標<sup>ツノキ</sup>林... 佛の... 白... 外... 後...  
 店 蕙 店 蕙 店 蕙 店 蕙

小文庫  
 後之部  
 藤... 甲... 天... 蕙...  
 店 令 店 令 蕙



くわの社や鳥のこゝに物産の  
てを以

吊初秋七日西星

え福六文月七日乃辰風雲天  
ら白浪銀川の岸とて  
橋板をわし一葉梳と向をわし  
こ二早も初秋を  
おとこ一  
うも海  
わし  
てあ

ホサウ

さる水

之廻昭

て夕  
西風の南小橋や  
史邦

同関之説

る君の急  
あ  
あ







いふはるる人あはれまき月の辨有出く他  
の家業と山をいひしき致うそや向  
て社を帯う門を鎖すまは友あまをいひし  
公員と富るまきしと五十の志願史自書自  
禁戒とあま

権 ちうちや盆を鎖めはら門の垣

権 権 内きれても権あまれなり

寂道 ちうちやいふまはら

乳母 ちうちやいふまはら

炎 ちうちやいふまはら

今

史 邦

去 年

山 店

史 邦

とくや大や後うりの襟う

盆 盆 盆 盆 盆 盆 盆 盆 盆 盆

牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛 牛

籠 子 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠 籠

不破 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

つ 風 や 教 ともいふもあはの園

と 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

神 草 や まい 日 枝 ぬ の 神 の ち ぬ

ま ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

今

今

今

式 之

今

今

今

今







後焼ひしうの月事の友  
今

前書

書掛

名月や門は潮

在彼

名流

鴨川や月之の空

名月や夕日

名月の西

今

今

今

今

今

今

今

今

今

今

名月や細と物  
名月や草花  
侍の名

常陸

名月や夕日

名月十六夜之辨

名月の名

名月

名月

山店

尾柳

史邦

今

今

今











福書やうものぬきつらひ 史邦

小母ん

焙燥のちむら 胸のちむら 今

鶺鴒やけいふうささる白川系 氷園

鶺鴒の壁土らぬ 畔のう 磨盤

唐此目も今や書ぬと啼鶺 くと代

初しよふふあや清ゆの鶺鴒 山店

しゆの鶺鴒けいふのさつと打せりり 史邦

道く乃鶺鴒すらし 薬五 穴行

唐わふ小袖ゆれてす鶺鴒と 心秀

唐もふふふ 東山の三麻の色 風騰

宿かつやは麻ととらかひ鳴ふた 一砂

東山と先くりて一巻あふい出

大山の唐のつらひ 史邦

名流ハあふもさぬ系鶺鴒頭 今

前書きされてる

菊の香や二庭ふきれたる雪は唐 今

んとしゆのわれや好ふの後の菊 今

流の香もほろけはぬか心 今



人々も古風よめりて草薙 史部  
刻もやもよもしめて苗のこれ 山行  
借りのけし一庵の晴やもあつた苗 大草  
わづらやまうしきとて序るお系新 山行

美まより二葉はしとるもあつたの  
実とすのりしはいつの年とや  
有る中し彼らも柿合も打つてはし

みちりよすいし

んく散く柿此の事も寝るの 去来  
濃柿をうらむらうしよの何と 大草

木のやぬ裡はひし子植うけが 買山  
やれよふふしとあもれと後 史部  
虫の音や閑寂船此兼乃中 養浩  
花ととも後空はのり 小舎  
秋の暮春留まはけりてのり 山店

山嵐 進輝 白句

うねりや日よすまじりちり柿 山行  
萬麻れ實とよけり出候り 小舎  
しみよしつらむのきとる巻の巻 史部



千貫のほろりまほりり若のち何 去 未  
言えれとこいーやうく申るうく  
こちとこいーやうく申るうく

十の夜の夜とやうけあつて

女のけやれも茶のぬ敷のり 史 邨

わつちらとやうの顔とやうの目 しん 次

葉の店とやうのやうのまあれたま

ふりーとやうのやうのやう

ちやうと東山はけりり信とあつて

あつてのよとやうのやうの山 喜 集

ふのやうのやうのやうの信とあつて

とやうのやうのやうのやう

葉のらの月やうのやうの信 芭 蕉

作 惣 國

しんやうのやうのやうのやうのやう

しんやうのやうのやうのやうのやう

しんやうのやうのやうのやうのやう

しんやうのやうのやうのやうのやう

しんやうのやうのやうのやうのやう



月... 妻の... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今

... 今



日細工の雑著の如きもの  
心之をたまはぬもの  
肌を隣の新茶のこぼして  
秋入のこぼしての如きもの  
語淡の清くはるるもの  
空の如くはるるもの  
花の如くはるるもの  
小舟の如くはるるもの

二  
竹の如くはるるもの  
木の如くはるるもの  
夕の如くはるるもの  
心の如くはるるもの  
花の如くはるるもの  
草の如くはるるもの  
石の如くはるるもの  
水の如くはるるもの



う  
 云ふことゆゑに今もあまの月の昔  
 のあまの河を眺むる乃に思ひ  
 指すような思ひをいつく思ひ  
 障よふよふの思ひを思ふ人の思  
 小南の思ひを思ふ人の思ひを  
 二、夜三の思ひを思ふ人の思  
 考して思ひを思ふ人の思ひを  
 一、性や思ひを思ふ人の思ひを

井  
 藤  
 部  
 氏  
 部  
 氏  
 部  
 氏

摩右之銘

人志能也  
 己り也  
 相いり也

元禄九年子歳三月日

五子河二条上河

井筒氏代所板



